東北文化学園大学　看護学科　紀要
第 13 巻　第 1 号　2024 年 3 月

〔報告〕

新型コロナウイルス禍の学内統合看護実習評価：卒後 1 年のインタビュー調査

早坂　笑子 [1)]，福原　彩花 [1)]，大﨑　真 [1)]，松田　優二 [1)]，太田　晴美 [2)]

1）東北文化学園大学医療福祉学部看護学科　2）東北福祉大学健康科学部医療経営管理学科

要旨

A 大学での学内統合看護実習において ICT を活用した模擬精神患者や模擬患者家族の対応、高機能シミュレーターを用いた演習による看護技術演習を実習内容に取り入れた。本研究では学生が卒業後 1 年の臨床経験を経て、学内統合看護実習での演習が、臨床の現場でどのような効果をもたらし、どのようなことが有効であったかについてインタビュー調査を通して明らかにした。データの分析の結果から、35 のサブカテゴリー、10 のカテゴリーが抽出され、更にカテゴリーを看護の実践、自己の成長、教員の関わりの 3 つのコアカテゴリーに分類した。結果より臨床に近い設定での演習を行った事で、模擬患者・家族対応、看護技術演習が臨床の現場で看護の実践につながっていた。また、教員のナラティブなフィードバックが学生自身の看護の自信となり、臨床の現場で活かされていることが示唆された。

【キーワード】新型コロナウイルス感染症、統合看護実習、学内実習、ICT、卒後 1 年目

Ⅰ．はじめに

2019 年に発生した新型コロナウイルス（以下、COVID-19）の影響により、看護基礎教育においては 2020 年の臨地実習は学内実習が困難となった。A 大学でも 2020 年からの統合看護実習は学内及び ICT を用いて音声課題を使った実習を展開した。太田ら（2021）は 2020 年に行った学内統合看護実習終了後の評価で、「看護技術やコミュニケーション不足」を明らかにした。また、太田らは学内実習の課題として「学生が卒業後に看護職として働いた際の成長にどのような影響を及ぼすのか、調査すること」があげられた。

その結果を参考に、2021 年度の学内統合看護実習では新たに ICT を活用した模擬精神患者や模擬患者家族対応、高機能シミュレーター「ナーシングアン®（株式会社 Laerdal）」（以下高機能シミュレーター）を用いた看護技術演習を学内実習で行った。

松田ら（2023）は、学生の卒業後 2 か月（実習から 1 年経過後）に学内実習での学びについてアンケート調査を行った。ICT を活用した模擬患者・家族対応について、松田ら（2023）は「精神科での勤務経験のある看護師を選定したことで、学生はリアリティのある患者対応の経験ができた」としており、福原ら（2023）は「患者家族役からもその場でフィードバックを得る事で、不安内容や意向を確認するための情報収集のみで終わらず、相手の立場に寄り添うことや家族への配慮に気づくことができた」と述べている。高機能シミュレーターを用いた看護技術演習について、大﨑ら（2023）は「導入、実技課題の実施、フィードバック時間と自主学習及び多様な実践経験を持つ教員への質疑応答機会といった構成で十分

な学習時間を確保したことが、学生の能動的な学習を促した」としている。このことから、ICT を活用したオンラインによる模擬患者・模擬患者家族対応や、高機能シミュレーターを用いた看護技術演習によって実習の学修効果を高めたことが示唆された。しかし、卒後 1 年まで追跡調査した研究は少なかった。

そこで、卒後 1 年の経験を経て臨床の現場で実際にどのような事が効果的で、どのような意義があったのか、インタビューを通して追跡調査した。

Ⅱ．2021 年度　学内統合看護実習の概要

統合看護実習の目標（表 1）に到達するため、2021 年度の学内実習では ICT を活用したオンデマンドによる音声課題の他、オンラインでのビデオ通話（以下 ZOOM®）を利用した、1）模擬精神患者への関わり、2）模擬患者家族へのオンライン面談、3）シナリオベースでの高機能シミュレーターを用いた患者の看護技術演習を行った。それぞれ、演習後には指導看護師役の教員への報告も行った。4）集合教育では、看護管理をテーマとして管理職の経験のある 3 名の教員（看護部長 1 名、看護師長 2 名）と、学生による質問形式でのディスカッションを対面にて行った。

1）模擬精神科患者への関わり

ZOOM®で患者役の精神科勤務経験のある看護師と学生 1 名、指導看護師役の教員で実施した。統合失調症の模擬患者に対する作業療法への参加の促しを学生が行い、患者の精神状態及び作業療法に対する意向をアセスメントした内容を報告した。その後、模擬患者役と指導看護師役の教員からフィードバックを行い、患者に対する言動・行動について振り返りを行った。

2）模擬患者家族へのオンライン面会

ZOOM®で患者家族役の一般市民または看護師 1 名と学生 1 名、指導看護師役の教員で行った。模擬患者家族役は、学生と面識がなく家族の入院経験のある市民 1 名と病院に勤務している看護師 5 名が順番で行った。学生は模擬患者家族 1 名とオンライン面会を行い、面会の内容を指導看護師役の教員へ報告した。その後模擬患者家族と教員からのフィードバックを行い、振り返りを行った。

3）高機能シミュレーターでの看護技術演習

高機能シミュレーターを用いた看護技術演習では、慢性心不全の患者の個別性を考慮したフィジカルアセスメントを実施した。模擬患者役の教員と指導看護師役の教員がフィードバックと振り返りを行った。1 人の学生が実施している時は、他の学生は自由に実習室で自己学修の時間とし、看護技術練習を行った。

4）集合教育

集合教育として看護管理実習や、ZOOM®を使用した学生同士でのディスカッションを行った。看護管理実習では、事前にオンデマンドによる音声課題を聴講してから、看護部長・看護師長の経験のある教員とのディスカッションを通して、看護管理や倫理についての学びを行った。

表 1　2021 年度　実習目標

1. 既習の知識・技術を統合・活用し、患者ケア実践を行う。
2. ケア実現のマネジメント能力を養う。
3. 医療チームの一員として看護（看護学生）の役割を遂行する。
4. 看護師の倫理綱領を遵守し、保健医療専門職として責任ある行動ができる。
5. 大学での学びと自己の看護観、および今後の自己課題を明確にする。

Ⅲ．研究目的

A 大学での新型コロナウイルス禍で行った学内統合看護実習が、大学卒業後約 1 年の臨床経験を経て、実際の臨床の現場ではでどのような効果をもたらしたか、また、学内統合実習が有効であったかを明らかにする。

Ⅳ．研究方法

1．研究対象者

A 大学 2021 年度統合看護実習で、学内実習を履修した 4 年次生 39 名のうち、研究に同意と回答を得られた卒業生 6 名を対象とした。

1）選定方法

研究参加の協力を依頼する際に、アンケート調査では 2 段階調査（卒業前の 3 月及び実習終了後から約 1 年後の 5 月）で追跡調査がある旨を説明した。同意を得られた卒業生にメールでインタビューによる追跡調査を依頼し、同意が得られた 6 名を対象とした。

2．研究期間

2020 年 9 月 18 日～2024 年 3 月 31 日

3．追跡調査期間

2023 年 2 月 27 日～5 月 15 日

4．データ収集方法

1）半構成的面接法

インタビューは口頭・書面で説明し、同意が得られた対象者に日時の調整を行い、ZOOM®もしくは大学のプライバシーが守られる個室での対面で、インタビューガイドに沿って実施した。卒業生 6 名に、一人 1 回 30 分～60 分程度のインタビューを行った。主な質問事項として 3 つの観点で質問し、自由意志による返答とした。主な質問はⅠ. 属性について、Ⅱ.学内統合看護実習内容についてⅢ.その他とした（表 2）。

5．データ分析方法

録音したインタビュー内容を逐語録におこし、語りのデータをコード化した。類似する内容を集め抽象度をあげながらサブカテゴリー、カテゴリー化し、さらに 3 つのコアカテゴリーに分類した。信頼性・妥当性を担保するため、研究者 5 名でコードを抽出し、類似性の分類を行った。さらにコアカテゴリーに至るまでの抽象度を上げる過程では、研究者間で一致した見解になるまで段階的にカテゴリーを精査しながら分析を行った。

6．倫理的配慮

本研究は、東北文化学園大学研究倫理審査委員会の承認（承認番号：文大倫第 21-26 号）を得て実施した。対象者には、研究の協力は自由意志によって行い、協力しないことによる不利益を被ることは一切ないことを口頭説明及び、研究協力依頼説明書を用いて説明した。また、インタビューは研究参加者への強制力がかからないよう、在学中の学生との関係性が強い教員（Student Advisor）並びに統合看護実習科目責任者以外の教員が実施した。インタビューのデータは研究室で取り扱った。データ保存のために使用する USB は、パスワード機能付き USB メモリーを使用し、かつ保管は鍵付きの戸棚に収納した。研究終了後、紙媒体のデータはシュレッターにて破棄し、USB に保管したデータは消去を行い情報の流出を防止する。万が一の場合でも流出しないようファイル毎にパスワードをかけて保存を行った。なお、開示すべき COI 関係はない。

表 2　インタビューガイド

Ⅰ.属性について 1．現在所属施設・病棟の特徴について教えてください。 2．現在の仕事内容について教えてください。
Ⅱ.学内統合看護実習の内容について 1．学内統合看護実習でどのような内容か覚えていることを教えてください。 2．統合看護実習で今の仕事に役立っていることがあれば、教えてください。 3．現在、直接役に立っているわけではないが、将来役に立つと思われる内容があれば教えてください。
Ⅲ.その他 1．看護学実習に関して振り返って思うこと。 2．その他意見、感想など。

表3　対象者の属性

	施設	病棟，診療科	対象者の特徴	勤務形態・夜勤の有無他	実践している看護
A	大学病院	脳神経外科・神経内科・総合内科　40床	神経難病	—	療養生活の援助、多職種連携、退院・転院支援
B	民間病院 300床	脳神経外科　５０床	慢性期・回復期	２交代 夜勤あり（3回/月）	緊急入院受け入れ対応、多職種連携、診療の補助（検査介助）、退院・転院支援
C①４月～９月の５か月の間	民間病院	消化器外科　40床	急性期～終末期	夜勤あり	周術期看護、緊急入院受け入れ対応、多職種連携、退院・転院支援
②現在	民間クリニック	美容外来 来院数：8～20名/日		日勤	全身脱毛
D	総合病院	消化器外科　48床	急性期	夜勤あり（自立）	周術期看護、緊急入院受け入れ対応
E	民間病院 200～300床	混合病棟　（外科・消化器科・耳鼻科他）41床	急性期	２交代 夜勤あり	周術期看護、退院・転院支援、多職種連携、診療の補助
F	民間病院 300床	脳神経外科　60床	急性期	日勤のみ（産休，育休）	周術期看護、緊急入院受け入れ対応、診療の補助、療養生活の援助、多職種連携、退院・転院支援、認知症患者への関わり

Ⅳ．結果

1．研究対象者の概要

研究対象者６名の背景は、表３に示すとおりである。いずれも病棟勤務をしており、そのうち１名は職場を変更し民間のクリニック勤務となり、もう１名は育休中であった。インタビューは１人１回とし、時間は 26 分～37 分（平均 32 分）であった。インタビューは ZOOM®で実施し、１名のみ対面で実施した。

2．分析結果

調査から得られたコードは 86 で、そこから 35 のサブカテゴリー、10 のカテゴリーが抽出された。さらにカテゴリーを看護の実践、自己の成長、教員との関わりの 3 つのコアカテゴリーに分類した。以下、カテゴリーを【　】、サブカテゴリーを［　］、コード生成の軸となる研究対象者の語りの一例を『　』と表記し、それぞれのカテゴリーについて記述する（表 4）。

1）コアカテゴリー1：看護の実践

(1)【看護技術の臨床実践】

このカテゴリーは［根拠に基づいた看護を意識している］［看護技術を応用している］［物品の準備が大切］［ケアに関する事前学習が大切］［ケアの優先順位が大切］［インフォームドコンセントの実践］［緊張感をもってケアができた］［精神症状出現時の対応］［精神障害者への対応］［全身状態のアセスメント］の 10 のサブカテゴリーより構成された。語りの一例として『技術の面では、病院それぞれでやり方は異なっているとは思いますが、基本的な考え方や、それをやる根拠については、実習で学んだ事が役になっている』との内容が聞かれた。

(2)【リスクマネジメント】

このカテゴリーは［移乗時の安全配慮ができている］のサブカテゴリーから構成された。
語りから『時間がかかるかなって思っても、安全な方を選ぶ』との内容が聞かれた。

(3)【患者と家族への関わり】

このカテゴリーは［患者の思いに配慮］［家族へ簡潔に説明する］［患者家族の思いを聴く］［患者の不安軽減を実践している］［患者の心を開く関り］の 5 つのサブカテゴリーから構成された。
語りからは『ご家族が混乱している状態で、もう支離滅裂な感じになっていたので、その時に間を待つとか、統合実習でやった（演習した）のを行った』との内容が聞かれた。

(4)【接遇】

このカテゴリーは［言葉使いを意識する］［態度を意識する］［笑顔を意識する］の３つのサブカテゴリーから構成された。語りからは『患者家族とのオンライン面談の実習で、笑顔が良いと言われたので、表情や話し方を意識してどうやれば相手に伝わるか考えながらやっていました』との内容が聞かれた。

2)コアカテゴリー2：自己の成長

(1)【セルフマネジメント】

このカテゴリーは［同期と会話しストレス発散］［タイムマネジメントが大切］［自己学習してから相談報告する］の３つのサブカテゴリーから構成された。語りからは『同期は大切にした方がいい』『同期の子たちといろいろお話とかして、ストレス発散』との内容が聞かれた。

(2)【看護観】

このカテゴリーは［看護の多様性を知った］［看護の基本的な考え方が役に立つ］の２つのカテゴリーから構成された。語りからは『病院以外で、もう全然活躍できるんだなってすごい感じた』との内容が聞かれた。

(3)【自己成長】

このカテゴリーは［自己の成長を振り返れた］［看護への自信］の２つのサブカテゴリーから構成された。語りからは『4年間で自分が成長した部分とか、頑張った部分とか、振り返るっていうのはすごい良かった』との内容が聞かれた。

(4)【職業適応】

このカテゴリーは［基礎教育と臨床とのギャップが少なかった］［臨床に近い多重課題体験］［仕事と子育ての両立］［交代勤務のイメージ化］の４つのサブカテゴリーから構成された。語りからは『緊張感を持ってできた』『ギャップは少なく働けたかなと思う』との内容が聞かれた。

表４　インタビュー結果

コアカテゴリー（3）	カテゴリー（10）	サブカテゴリー（35）
看護の実践	看護技術の臨床実践	根拠に基づいた看護を意識している
		看護技術を応用している
		物品の準備が大切
		ケアに関する事前学習が大切
		ケアの優先順位が大切
		インフォームドコンセントの実践
		緊張感をもってケアができた
		精神症状出現時の対応
		精神障害者への対応
		全身状態のアセスメント
	リスクマネジメント	移乗時の安全配慮ができている
	患者と家族への関わり	患者の思いに配慮
		患者へ簡潔に説明する
		患者家族の思いを聴く
		患者の不安軽減を実践している
		患者の心を開く関わり
	接遇	言葉遣いを意識する
		態度を意識する
		笑顔を意識する
自己の成長	セルフマネジメント	同期と会話しストレス発散
		タイムマネジメントが大切
		自己学習してから相談報告する
	看護観	看護の多様性を知った
		看護の基本的な考え方が役立つ
	自己成長	自己の成長を振り返れた
		看護への自信
	職業適応	基礎教育と臨床のギャップが少なかった
		臨床に近い多重課題体験
		仕事と子育ての両立
		交代勤務のイメージ化
	他者に伝える	状況報告の実践
		書く力
		プレゼンテーション力
教員との関わり	教員の介入	教員のコメントが励み
		教員のフィードバックが役立つ

(5)【他者に伝える】

このカテゴリーは［状況報告の実践］［書く力］［プレゼンテーションする力］の 3 つのサブカテゴリーから構成された。語りのからは、『SBAR での報告する』『報告の仕方は役に立っている』『グループディスカッションとかでしゃべる方はすごい活かせている』との内容が聞かれた。

3）コアカテゴリー3：教員の介入

(1)【教員の介入】

このカテゴリーは［教員のコメントが励み］［教員のフィードバックが役立つ］の 2 つのサブカテゴリーから構成された。語りから『メッセージやコメントが結構自信に繋がった』との内容が聞かれた。

Ⅵ. 考察

1. 看護の実践

2020 年度のコロナ禍での初めの統合看護実習では、ICT による音声課題や 3 密を避けた対面での学修、自己課題となった。対面によるグループワーク等も制限されたことや入構禁止措置により演習が行えなかった。太田ら（2021）は「看護技術や、コミュニケーション等、臨床経験不足は否めない」と看護の経験不足が課題と述べている。2021 年度は、入構可能となり感染予防措置を行ったうえで学内演習が可能となった。そこで、ZOOM®による模擬患者・家族対応やシナリオベースの高機能シミュレーターや模擬患者による看護技術演習、ZOOM®でのグループディスカッションを取り入れた。今回のインタビューの結果から、卒後 1 年目の臨床の現場では【看護技術の臨床実践】や【リスクマネジメント】において『技術の面では、病院それぞれでやり方は異なっているとは思いますが、基本的な考え方や、それをやる根拠については、実習で学んだ事が役になっている。』と臨床の現場で役に立っていると語っていた。学内実習で行われたシナリオベースの看護技術演習では、病棟を想定した模擬患者への全身状態のアセスメントと状態報告、その後の車いす移乗動作ならびに移動を行い、演習の振り返りを行った。その学びが臨床の現場では［根拠に基づいた看護を意識している］ことにつながり、根拠を持って看護の実践に活かされていた。また、看護技術演習では［移乗時の安全配慮ができている］よう患者への安全に配慮した演習を実施した。この演習での学びが臨床での療養環境を整える事や模擬患者の車いすへの移乗、移送などの技術演習が臨床で活かされていた。厚生労働省の報告（2023）によると看護職のインシデントでは新人看護師が約 2 割を占めており、なかでも療養上の世話に関した場面も少なくはない。このことから演習が有効的であると示唆された。

また、山田ら（2022）は「オンライン実習では、画面越しに教員が模擬患者を演じることに学生が抵抗を抱く事や患者像をイメージしにくい」と述べている。ZOOM®で行われた模擬精神患者対応や模擬患者家族対応では、教員ではなく模擬患者役に専門の臨床経験のある看護師や家族役に一般人の協力を得ることで、面識のない相手との対話を通し、より臨床に近い状況を設定することがきた。実際に、臨床の場で『ご家族が混乱している状態で、もう支離滅裂な感じになっていたので、その時に間を待つとか、統合実習でやったのを行った』ことから、家族への声の掛け方や会話の間の持ち方など、演習での経験が活かされていた。また、演習後のフィードバックも教員だけではなく、模擬患者・家族役から直接聞くことで、『患者家族とのオンライン面談の実習で、笑顔が良いと言われたので、表情や話し方を意識してどうやれば相手に伝わるか考えながらやっていました。』と語っていた。実習中に気づいた自分の髪を触る癖や、オンラインでの模擬患者・家族への受け答えの経験やコロナ禍で常時マスクを着用しているこ

となど、相手にどう見られているかを常に［態度を意識する］ことができていた。この学びが【患者家族との関わり】【接遇】に繋がっており、臨床の現場で役に立っていると示唆された。

2. 自己の成長

ICT での音声課題や ZOOM®による模擬患者・家族との関わりでの聴講では、［仕事と子育ての両立］［交代勤務のイメージ化］による子育てしながら働く事や、夜勤での看護師の仕事の様子を聞くことで、卒業後のイメージを明確化することができた。また、［臨床に近い多重課題体験］を行うため、学内演習では病棟を想定した技術課題や模擬患者・家族役には専門の臨床経験のある看護師や一般人の協力のもと、臨床に近い演習を取り入れる事でリアリティさを演出した。臨床に近い演習を経験したことで、『緊張感を持ってできた』や『ギャップは少なく働けたかなと思う』と語っていた。また、看護師の資格を活かしながら働いている看護師の音声課題を聴講することで、病院で働く以外の看護の仕事を知ることができた。その経験を聞くことにより、地域で働く看護師や専門職を活かした患者（利用者）とのかかわり方から、［看護の多様性を知る］ことができ、看護師としての【職業適応】や【看護観】に繋がったと考える。

［状況報告の実践］では、模擬患者・家族の対応について指導者役の教員へ状況の報告を行う演習を行った。実習室を病棟に見立て、シナリオベースにそって看護技術演習を実施した。高機能シミュレーターや模擬患者の観察した内容について、緊張感をもって指導看護師役の教員へ報告を行った。臨地実習に近い臨場感ある実習を経験することで、『SBAR での報告する』『報告の仕方は役に立っている』と語っていた。実際の病棟の現場では、病棟のリーダー看護師や夜勤者への申し送りで報告する際に役に立つことがわかった。

3 密を避けるためにグループディスカッションは ZOOM®で実施したが、はじめはなかなか意見が出なかった。堀内（2021）は「Web 環境では、落ち着いて考えることができ、病室内で見えなかった学生の言動が可視化され、学友や教員から落ち着いたフィードバックが得やすい等の利点」と述べている。語りからは『言いたい事を表現できない』と、感じたことを言葉にとして伝える、書いて表現する事の難しさについて話されていた。しかし、演習でディスカッションを重ねるごとに落ち着いて相手の言葉を聞き、お互いの表情や言葉の出方がわかり、最終的に全員が意見を伝えられるようになった。『グループディスカッションとかでしゃべる（発言する）方はすごい活かせている』との語りから、自分の考えを整理して報告する事ができていた。ZOOM®で行われたディスカッションの経験が、【他者に伝える】ことができ、臨床の現場でも役に立っていることがわかった。

【セルフマネジメント】として、『同期は大切にした方がいい』『同期の子たちといろいろお話とかして、ストレス発散』していることから、就職後に同期との関係性が良好であることがわかった。同期と仕事やプライベートの話しをする事で、自分の中に負の感情を貯めず前向きに自己をコントロールできていた。しかし、松本ら（2022）は「新人看護師の支援体制が、技術だけではなく精神的にも新人看護師に細やかな支援へと変化していることが職務満足にもつながり、看護実践の能力への影響する」と述べていることから、セルフマネジメントができていても、新人看護師には適宜支援が必要であると考えられる。また、2020 年度は臨地実習が学内実習となり、更に 3 密を避けるために臨地実習のような複数患者を受け持つ多重課題や実技を伴った演習ができなかった。そのため、太田ら（2021）のアンケートでは「このまま臨床に出ても大丈夫だろうか」と「将来の不安」が聞かれた。しかし、2021 年度も臨地実習ができず学内実習となったが、インタビューを通して研究対象者からは『○○ができた』『○○が学べた』

との意見が聞かれるなど、コロナ禍においても前向きな考え方に変わってきている。学内実習を通して『4 年間で自分が成長した部分とか、頑張った部分とか、振り返るっていうのはすごい良かった』と自身の出来ていないところや反省点だけではなく、統合看護実習では自身の頑張った部分を振り返る事で、大学での 4 年間の学びが【自己成長】に繋がっている事が示唆された。

3. 教員との関わり

演習後の教員からのアドバイスや音声課題でのコメントでは、［教員のコメントが励み］［教員のフィードバックが役立つ］など、教員から『こういう風にした方がいいとか、いろいろ学べた』ことから、演習後に不足していた点について具体的な助言や教員の臨床での豊かな経験談など、ナラティブな関わりが励みになっていることがわかった。山田ら（2022）は「教員が演じる模擬患者による専門的な視点からのフィードバックにより課題を明確にし、その達成に向けて実践の反復ができたことが学びにつながった」と述べている。今回、模擬患者や指導看護師役を行った教員から、役の立場と専門的な視点から学生の個別性に沿った課題について、ひとりひとり時間をかけて指導することで、学生自身も振り返り、学びに繋がることができた。また、『メッセージやコメントが結構自信に繋がった』との語りから、教員は学生の不足している知識・技術だけではなく、それぞれの学生のできるところにも着目し助言をしていた。大野（2021）は、「教員は学生がコロナ禍で身についた強みを学生自身で認識できるようにする必要がある」としており、「コロナ禍だから身につけた強みを学生自身が自覚し自信につなげられるような学生へのケアも重要」としている。学内統合看護実習での【教員の介入】が、卒業後も臨床の現場での患者への看護技術の提供や患者・家族へのかかわり方への自信に繋がっていることが示唆された。

Ⅶ. 結論

学内統合看護実習で行った、ICT を活用した模擬精神患者や模擬患者家族の対応、高機能シミュレーターを用いた看護技術演習は、臨床に近い体験となり卒業後の看護の実践に繋がることができていた。

教員はナラティブなフィードバックを行い、学生が自分の良さに気づくよう促していた。さらには、臨床での患者の対応にも繋がり看護への自信となっていた。

学内統合看護実習での学びは、自己の成長につながり卒業後の臨床の現場で活かされていた。学内で行った統合看護実習が卒業後の看護実践に有効であったことが示唆された。

Ⅷ. 研究の限界

今回の研究では、インタビューの対象者が 6 名と限られた人数であり、卒後 1 年目としていたが 1 名が産休中、1 名が転職していたため、一般化は出来ない。COVID - 19 は 5 類感染症に引き下げられたが、新興感染症等の危険は常にあり、臨地実習が学内実習へ振り替える場合もある。そのため、学生の学修状況や卒業後の新人看護師の実態については、今後も継続して調査を行う必要があると考える。

文献

福原彩花，早坂笑子，大﨑真，他．(2023)．新型コロナウイルス禍の学内統合看護実習評価：ICT を活用した模擬患者家族対応による学修効果．東北文化学園大学看護学科紀要．12(1)，29-36.

堀内成子．(2021)．COVID-19 迫られた改革と対応，その成果と課題．聖路加看護学会誌．24(2)，33-36.

厚生労働省．全般コード化情報の分析について．https://mhlw.go.jp．［アクセス 2023 年 10 月 22 日］.

松田優二，福原彩花，早坂笑子，他．(2023)．新型コロナウイルス禍の学内統合看護実習評価：オンラインによる模擬精神科患者対応の試み．東北文化学園大学看護学科紀要．12(1)，21-28.

松本晃子，西上あゆみ．(2022)．COVID-19 により修学に影響を受けた新人看護師のレジリエンスと看護実践能力 - 2020 年度と 2021 年度入職の新人看護師を比較して - ．日本看護科学会誌．42，661-669.

大野かおり．(2021)．COVID-19 が教育に与えた影響と新人看護師育成の課題．看護教育．62(10)，934-943.

大﨑真，早坂笑子，松田優二，他．(2023)．新型コロナウイルス禍の学内統合看護実習評価：シミュレーション教育を活用した看護技術演習の試み．東北文化学園大学看護学科紀要．12(1)，11-20.

太田晴美，大﨑真，早坂笑子．(2021)．新型コロナウイルス禍の学内統合看護実習評価 - 学生アンケート結果から - ．東北文化学園大学看護学科紀要．10(1)，27-42.

山田カオル，遠藤和子．(2023)．教員が演じる模擬患者を活用した成人慢性期看護学実習の学び - 実習終了時の学生のインタビューより - ．北日本看護学会誌．25(2)，43-57.